第２節　平坦部Ａ周辺における利用形態の変遷について

平坦部Ａの発掘調査では本堂跡や本坊建物跡、庭園遺構など建て替えや改修の履歴を有した複数の遺構が検出された。各遺構の詳細や主要な建物跡の評価については、本報告書第１・２分冊所収の報告文及び本章第３節を参照いただきたいが、本節では平坦部Ａ、すなわち中世等妙寺中枢域における利用形態の変遷を明らかにし、その歴史的背景に迫ってみたい。なお、段階設定にあたっては、近年発掘調査が及んだ平坦部Ａ－２（観音堂跡）の成果も勘案し、提示する。

１　各時期の動向（図 3-17 ～ 3-20、表 3-13）

本報告書での正式報告以前から示してきた〔鬼北町教委 2016、織田 2018・2021 等〕ように、平坦部Ａで検出された２時期の本堂跡（ＳＢ０１・０２）を基準に等妙寺開山期をⅠ期とすると、大きくは４期（前Ⅰ期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期）を設定できる。これを踏襲した上で、遺構・遺物の所見から小期を加えた以下の時期区分に基づき、まずは各時期の動向を整理したい。

（１）14 世紀前半以前（前Ⅰ期／プレ等妙寺期）

等妙寺開山以前の段階で、平坦部ＡⅢ区庭園地区及び平坦部Ａ－２でその痕跡をみることができる（図 3-17、表 3-13：①）。Ⅲ区庭園地区では、本時期に該当する堂宇伽藍など明確な建物跡は未検出であるが、14 世紀代の土器が伴うにぶい黄褐色造成土下層から水路状遺構が一部検出されており、等妙寺開山を遡る遺構と考えられる。池ＳＧ０１周辺や滝ＳＸ０２堀方より出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、平安時代中期～鎌倉時代という古い年代が複数示された。さらに、平坦部Ａ－２にて検出された、護摩跡と考えられる炭・焼土集中遺構の炭化材はすべて 13 世紀代を主とする鎌倉時代の年代を示し、同一遺構面に伴う礎石も１石ではあるが検出されている（本報告書第２分冊第４章）。

こうした現地の状況を積極的に評価すれば、等妙寺本尊として伝わる鎌倉前期造像の如意輪観音坐像は平坦部Ａ－２に祀られていた公算が大きいことに加え、平坦部ＡⅢ区池や平坦部Ａ－２でみられるような「池・岩崖・観音」という景観モチーフは、近江・石山寺や加賀・那谷寺の系譜に連なる観音浄土補陀落山に見立てられ、古くに遡るとの見解が示されている〔久保 2020、2021a・b〕。

当該期の遺物が得られていないことに留意しなければならないが、池ＳＧ０１や滝ＳＸ０２、観音堂周辺が等妙寺開山以前にすでに信仰空間として成立、前身寺院の存在した蓋然性は高まっている。

（２）14 世紀代（Ⅰ期／等妙寺開山期）

等妙寺開山段階で、主に 14 世紀代と考えられる（図 3-18、表 3-13：②）。Ⅰ・Ⅱ区では石積みＳＷ００１下段が構築され、旧本堂ＳＢ０１が創建された段階に相当する。石積みＳＷ００１のほか、旧本堂裏の溝状遺構ＳＤ０２－１や前庭部の石積みＳＷ００２、平坦部上端の軸線などに規格性が看取され、旧本堂軸Ｎ 25° Ｅに合わせたレイアウトがなされている。なお、この段階ではⅠ・Ⅱ区間に高低差が存在していたようである。

旧本堂跡ＳＢ０１の建立時期に関して、遺物から推し測ることはできないが、旧本堂縁石列基盤面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定によれば 13 世紀末～ 14 世紀末の年代が得られている（本報告書第２分冊第４章）。およそ１世紀の時間幅をもつが、概ね 14 世紀のうちには木材が伐採され、

前Ⅰ期／プレ等妙寺期

・平坦部Ａ（如意顕院跡）池周辺や平坦部 A-2（観音堂跡）で
平安末～鎌倉時代の年代（放射性年代測定）
・平坦部 A-2 の炭・焼土集中遺構、同一面上の礎石（１石）
・池や滝の初期造成か
・池周辺で部分的に水路状遺構（堂宇伽藍などの建物跡は未検出）
・等妙寺開山以前に信仰空間として成立か

・平坦部Ｂなどで、龍泉窯青磁Ⅱ・Ⅲ類が確認されるもごくわずか

図 3-17　14 世紀前半以前の平坦部Ａ（如意顕院跡）周辺

Ⅰ期／等妙寺開山期

・如意顕院 旧本堂（SB01）建立
・本坊石積み（SW001）下段構築
・池状遺構（SX01）、滝（SX02）、池（SG01）など庭園部の整備
・平坦部 A-2 観音堂建立
▶旧本堂（SB01）建物軸に沿った施設配置がなされる
・遺物は認められるもごくわずか

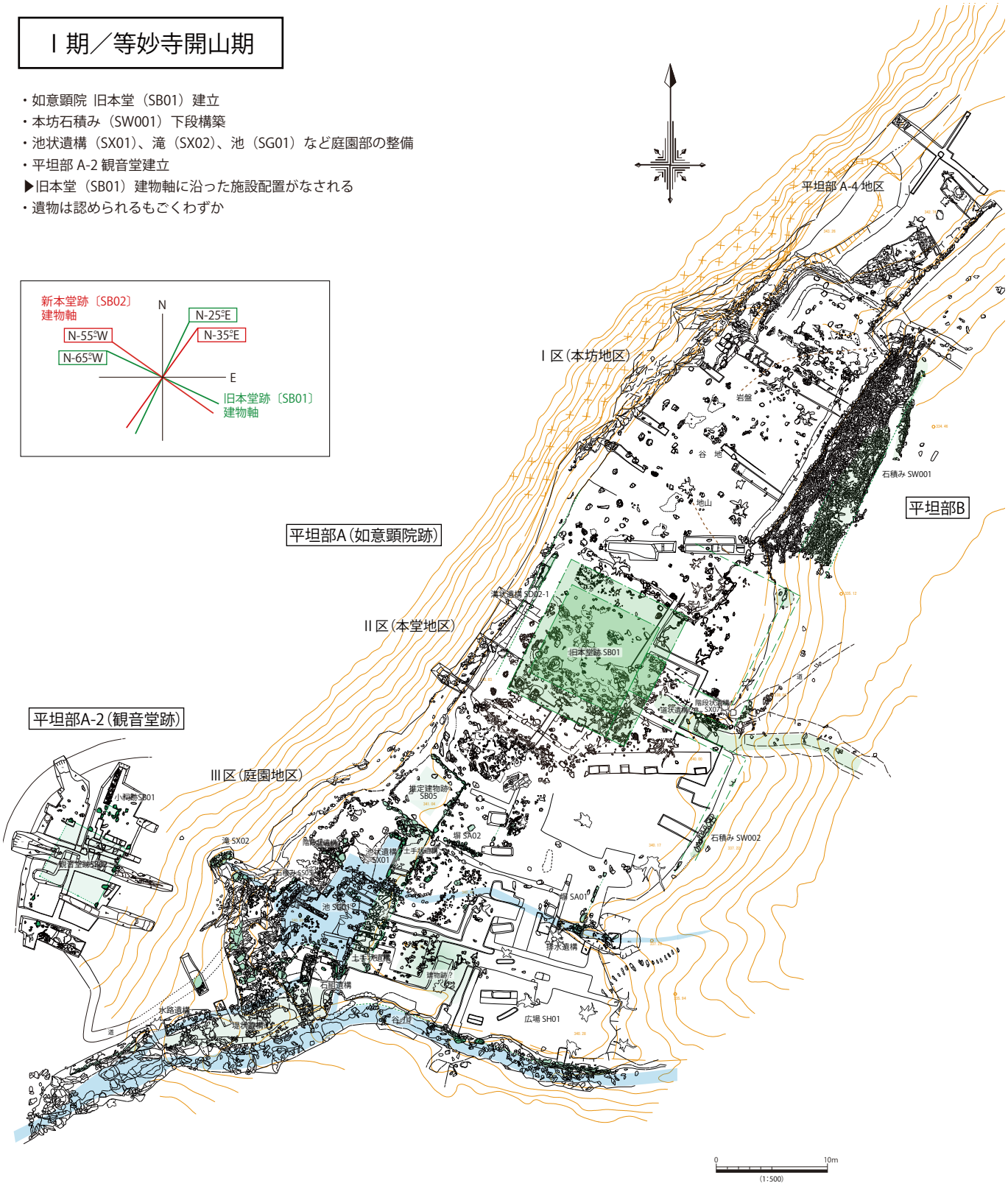

図 3-18　14 世紀代の平坦部Ａ（如意顕院跡）周辺

Ⅱ期前半／等妙寺革新期

・本期までに旧本堂（SB01）焼失か
　本坊石積み（SW001）上段構築、大規模造成
・鍛冶工房（SB07）操業
・如意顕院 新本堂（SB02）建立か
・15 世紀後半頃から貿易陶磁器、備前焼の搬入量が増加傾向
・出島状遺構、土手状遺構拡幅など庭園部のⅡ期整備開始
▶新本堂（SB02）建物軸に沿った施設配置がなされる

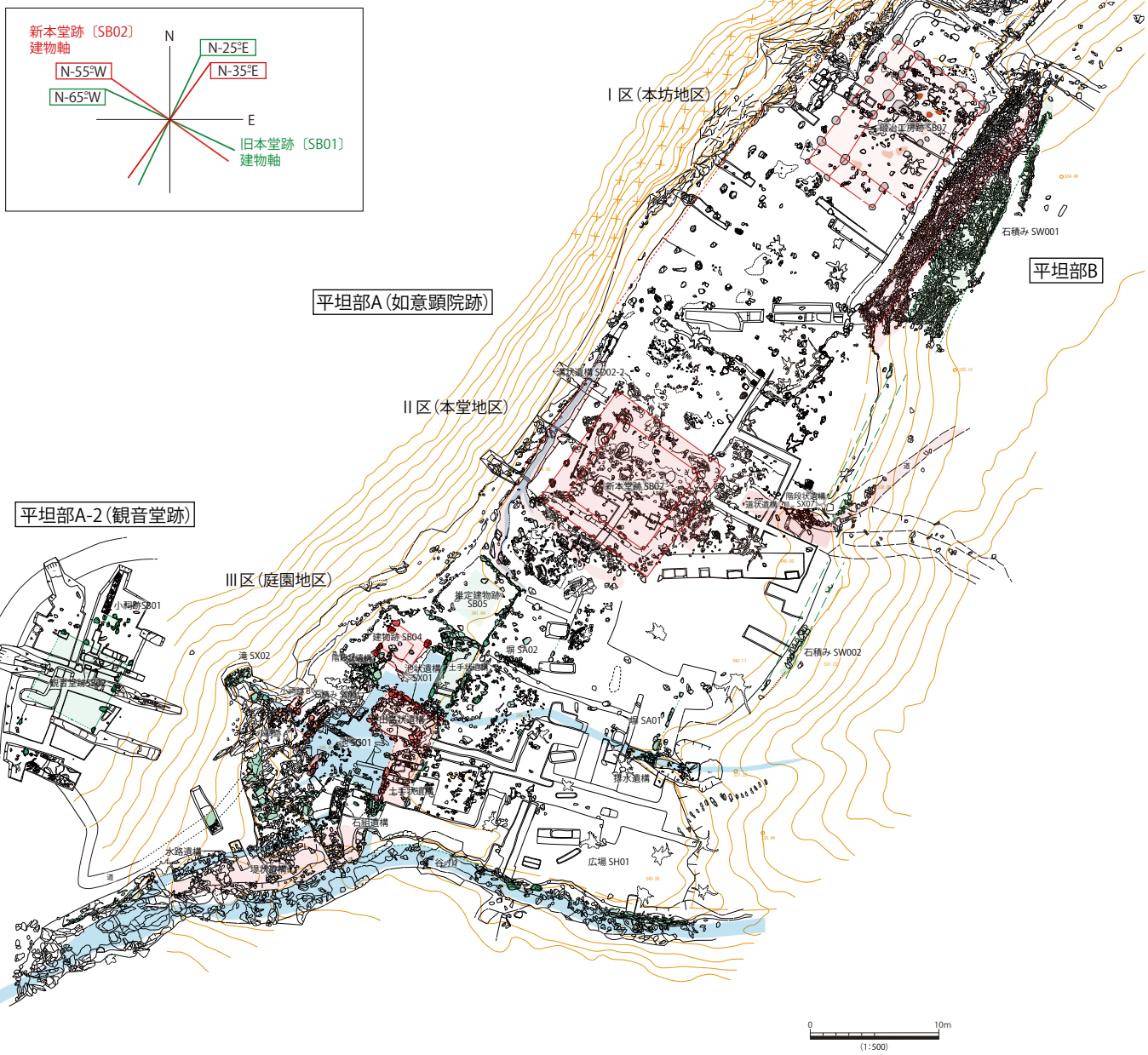

図 3-19　15 世紀後半頃の平坦部Ａ（如意顕院跡）周辺

Ⅱ期後半／等妙寺革新期

・客殿・庫裏一体型の本坊建物（SB03）建立
・Ⅱ期整備が完成
・15 世紀末から 16 世紀前半にかけて貿易陶磁器搬入量のピーク
▶遺構、遺物からみた最盛期

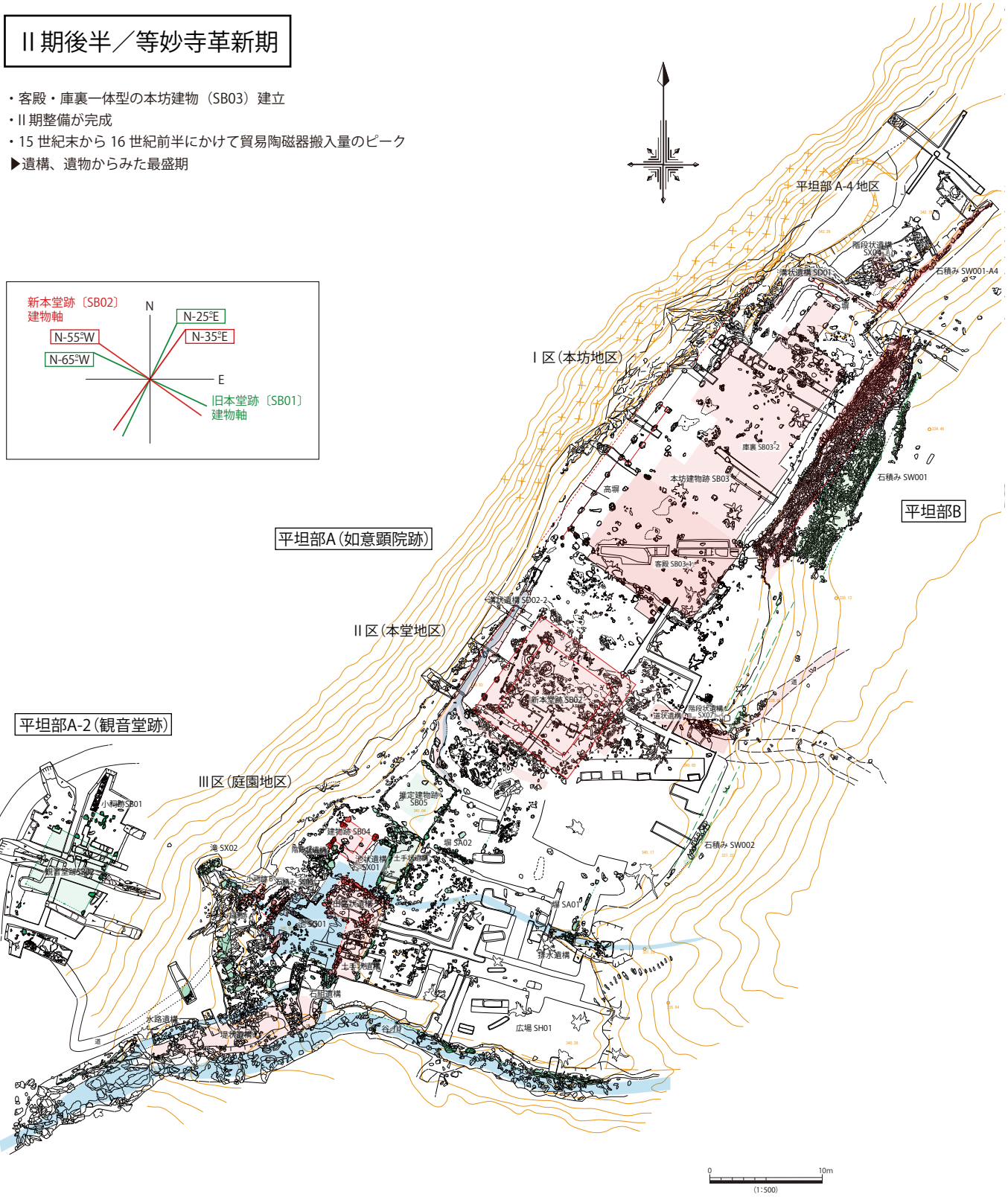

図 3-20　15 世紀末～ 16 世紀代の平坦部Ａ（如意顕院跡）周辺

旧本堂が創建されたことに疑いはなかろう。

Ⅲ区では苑池が造営される。池ＳＧ０１、池状遺構ＳＸ０１、滝ＳＸ０２、石積みＳＳ０５、土手状遺構、石組遺構、堤状遺構、水路遺構、階段状遺構、ＳＢ０５、塀ＳＡ０１・０２など大方の遺構が該当し、これらも旧本堂跡の軸線Ｎ 25° Ｅ及びＮ 65° Ｗに合わせた施設配置を基調とする。この段階では石組遺構周辺でみられる砂質シルトを用いた造成や、滝ＳＸ０２滝口の石積み、池ＳＧ０１の西側護岸を成す石積みＳＳ０５など丁寧な普請、築庭が特徴として挙げられ、池状遺構ＳＸ０１縁石にみるように石を立てる技法も多様されている。

池ＳＧ０１、滝ＳＸ０２を正面に見るＳＧ０１の東側、土手状遺構を挟んですぐの空間には、大きめのホルンフェルスや持ち込みによるとみられる花崗岩が、洪水堆積層に覆われ検出されている。原位置を保っておらず、具体的証拠は不十分であるが、池鑑賞あるいは観音懺法など儀礼の場として小規模な建物を想定できないだろうか。

平坦部Ａ－２では、炭・焼土集中遺構（13 世紀代か）が形成された前Ⅰ期遺構面の上位となる遺構面に、観音堂跡とみられる方三間の礎石建物が、旧本堂と共通する軸線で建立されている。

（３）15 世紀前半～中頃

平坦部ＡⅠ区西側背面の岩盤を開削、版築と石積みＳＷ００１上段構築により、大規模な敷地造成がなされたと考えられる段階である（表 3-13：③）。当段階でⅠ・Ⅱ区間の高低差が解消されたとみられる。石積みＳＷ００１上段構築に伴う版築土から出土した土師質土器は概ね 15 世紀前半期の年代で捉えられる（第１分冊報告番号：43 等）。旧本堂跡ＳＢ０１は、鍛冶工房ＳＢ０７が操業し、新本堂ＳＢ０２を建立した前段階、つまり 15 世紀中頃までには焼失したと推測され、旧本堂縁石列基盤面から出土した炭化材の存在がこれを補強する。遺物量は依然として少ない。

（４）15 世紀後半頃（Ⅱ期前半／等妙寺革新期）

Ⅰ・Ⅱ区では、南北５間×東西４間規模の掘立柱による鍛冶工房ＳＢ０７が操業し、新本堂ＳＢ０２を建立した段階である（図 3-19、表 3-13：④）。先に普請された石積みＳＷ００１上段のほか、本期に掘削される溝状遺構ＳＤ０２－２も新本堂軸Ｎ 35° Ｅに並行する。遺物の年代観や炭化材の放射性炭素年代測定結果から、15 世紀後半頃と考えられる。

Ⅲ区ではこの頃に改修がなされ、開山段階からの施設を用いながらも、ＳＢ０４や出島状遺構など新本堂ＳＢ０２の軸線Ｎ 35° Ｅ及びＮ 55° Ｗに沿った施設が新造される。滝ＳＸ０２水落両側に置かれた小祠跡Ａ・Ｂ、池ＳＧ０１の西側護岸を成す石積みＳＳ０６なども当期に該当し、堤状遺構も改修された可能性がある。土手状遺構は西側護岸に石が配され、拡張されている。特に石積みＳＳ０６や出島状遺構などは開山期の遺構と比較すると、粗雑な普請、築庭が顕著である。出島状遺構の造成土は円礫を含んだ砂質粘性土であることから、洪水堆積土を用いた可能性も考え得る。水害による庭園地区の損壊が、本期改修の一因と言えるかもしれない。なお、貿易陶磁器や備前焼の搬入量は増加傾向にある。

（５）15 世紀末～ 16 世紀前半（Ⅱ期後半／等妙寺革新期）

先の新本堂ＳＢ０２建立や苑池の改修に加え、南北４間×東西６間の客殿、南北９間半×東西５間半の庫裏を備えた客殿・庫裏一体型の本坊建物ＳＢ０３が創建された段階で、遺構・遺物からみた最

表 3-13　平坦部 A（如意顕院跡）周辺の変遷想定

年代	発掘調査の所見（遺構・遺物）		等妙寺関連の主なできごと
	前Ⅰ期（プレ等妙寺期）	① 推定前身寺院 ・平坦部 A（如意顕院跡）池周辺や平坦部 A-2（観音堂跡）で平安末～鎌倉時代の年代（放射性年代測定） ・平坦部 A-2 の炭・焼土集中遺構、同一面上の礎石（1 石） ・池や滝の初期造成か ・池周辺で部分的に水路状遺構（堂宇伽藍などの建物跡は未検出） ・等妙寺開山以前に信仰空間として成立か ・平坦部 B などで、龍泉窯青磁Ⅱ・Ⅲ類が確認されるもごくわずか	
1300			
14 世紀	Ⅰ期（等妙寺開山期）	② 奈良山等妙寺（天台戒律復興運動教団の活動） ・如意顕院 旧本堂（SB01）建立 ・本坊石積み（SW001）下段構築 ・池状遺構（SX01）、滝（SX02）、池（SG01）など庭園部の整備 ▶旧本堂（SB01）建物軸に沿った施設配置がなされる ・遺物は認められるもごくわずか	1320　開山僧理玉、宇和荘内奈良山にて円頓戒修業の道場を開き、12 年籠山行を始める（「等妙寺縁起」「歯長寺縁起」） ▼商人的性格を有する在地領主 開田善覚による支援 1330　理玉、奈良山での籠山修行を終え、宇和荘庶務代官開田善覚と立間郷 大光寺で出会う　善覚、理玉に帰依し、等妙寺造営料足寄進　等妙寺の庫裏・方丈が成り、僧衆 6 人が住む（「歯長寺縁起」） 1333　理玉ら僧衆と善覚、上洛して恵鎮に会う（「歯長寺縁起」） 1336　理玉ら伊予へ帰国するが、造営の進まない等妙寺に入らず、長期にわたって歯長寺や善覚邸に住む（「歯長寺縁起」） 1357　理玉没 1367　山下にて十禅師宮遷宮（僧形神坐像（十禅師権現）像底墨書） 1373　等妙寺 2 世通悟、理玉死去の際に書写した綱編の目録などを法勝寺惟賢に送る（「西教寺文書」） 1377　伊予国分 12 カ寺のうち、等妙歯長寺が各々 2 貫文、その他が各々 1 貫文を負担する（「法勝寺興行条々」） ▼永和年間（1375 ～ 79 年）西園寺氏、宇和荘下向 1397　玉禅、等妙寺において大般若経を書写（「長善寺大般若経　奥書」）
1400			
15 世紀		③ ・遺物はわずかに認められる ・如意顕院 旧本堂（SB01）焼亡か ・本坊石積み（SW001）上段構築、大規模造成	▼法勝寺住持以前に等妙寺住持になる例がみえ、等妙寺の寺格の高さが窺える 1427　等妙寺住持宗秀、前住等妙寺で法勝寺 21 世紹空静能の本願により本尊の岩座を修造（「天台円頓妙戒都鄙代々住持次第・本尊台座墨書銘」） 1445　（等妙寺住持宗舜智栄、のち法勝寺 27 世）
	Ⅱ期（等妙寺革新期）	④ ・鍛冶工房（SB07）操業 ・如意顕院 新本堂（SB02）建立か ・15 世紀後半頃から貿易陶磁器、備前焼の搬入量が増加傾向 ・出島状遺構、土手状遺構拡幅など庭園部の再整備開始 ▶新本堂（SB02）建物軸に沿った施設配置がなされる ・平坦部 B で鍛冶操業か ・客殿・庫裏一体型の本坊建物（SB03）建立	▼伊予西園寺氏による歯長寺庇護・氏寺化により、地域における等妙寺の相対的地位は低下か 1453　伊予西園寺氏、等妙寺と歯長寺が宇和荘永長郷内成俊名と立花津の下地をめぐる争いに裁定し、改めて歯長寺に寄進（「宇和旧記」） 1467　法勝寺、応仁の乱で炎上し、壊滅的被害を受ける
1500		⑤ ・15 世紀末から 16 世紀前半にかけて貿易陶磁器搬入量のピーク ▶遺構、遺物からみた最盛期	1500　吉蔵寺僧（翌年等妙寺住持）隆円十穀、高麗渡海成就を発願し、北野社一切経の欠巻部分を書写する（「北野社一切経奥書」） 1511　等妙寺住持智相、西川豊後守綱親が願主の周知郷野村の三島大明神社宝殿の上棟にあたり、遷宮の導師を務める（「宇和旧記」） ▼伊予・土佐近隣の在地領主らの庇護を得て、寺勢を維持 1534　紹円大徳、後西園寺玖春、土佐国幡多郡和井野左近将監基延らとともに、理玉和尚忌のために華鬘を造る（「宇和旧記」「華鬘箱書写」） ▼法勝寺と等妙寺との密接な交流 1540　法勝寺 35 世住持周見、伊予国へ下向し、等妙寺方丈で台密の穴太流秘書「護摩私記」を写す（「護摩私記奥書」）
16 世紀		⑥ ・16 世紀中葉頃から貿易陶磁器搬入量が急激に減少するも、存続 ・16 世紀後半～末の新たな搬入品量はわずか ・大規模な火災の痕跡（平坦部 A） ▶中世等妙寺の廃絶	1549　今城能光、開田善覚が寄進した両界曼荼羅を修復し、等妙寺塔頭智光院へ寄進する（「宇和旧記」「両界曼荼羅裏書銘」） 1553　津島満願寺、地蔵絵三幅一対を等妙寺へ寄進（「宇和旧記」） 1580　等妙寺 25 世住持旭栄、西ノ川美作守政輔による黒土郷松森村の三島神社の上棟に、遷宮の導師を務める（「宇和旧記」「三島大明神棟札写」） 1583　住持旭栄のとき、僧俗一体で観音講を組織し、等妙寺厨子を再造する（「宇和旧記」「等妙寺厨子銘」） 1587　宇和郡入りした戸田勝隆により、寺領・寺宝を没収される（「宇和旧記」ほか） 1588　天火により七堂伽藍ことごとく焼失する（「宇和旧記」） 1590　鎌田正秀、等妙寺の荒廃により本尊を奈良山下の現在の寺地（霊光庵）へ移す（「宇和旧記」「等妙寺縁起」）

Ⅲ期／中世等妙寺廃絶後

・天正 16 年（1588）の焼失以後、大きな土地改変や利用なし
・礎石建物跡 SB06（小堂）
▶本坊建物焼失後さほど時を経ずに建てられた、往時を偲ぶ祠のようなものか
・Ⅱ区表層より寛永通寶出土

図 3-21　17 世紀初頭前後の平坦部Ａ（如意顕院跡）周辺

盛期である（図 3-20、表 3-13：⑤）。本坊建物ＳＢ０３は１間＝６尺５寸（約 195㎝）の京間を採用し、柱間には１間半や半間が認められる。こうした特徴は建築史上、京都でも応仁・文明の乱（1467～ 1477 年）以降にしかみられないという〔三浦正幸氏の教示〕。遺物の年代観から 15 世紀末～ 16 世紀前半頃の建立を想定しているが、京都で 15 世紀後半以降に見られる建築様式が、地方において早い段階に採用されている点は注目に値する。

鍛冶工房跡ＳＢ０７の柱穴が石積みＳＷ００１の根切りにより切られていることから、石積みＳＷ００１の天端付近の石は鍛冶工房操業後に構築されたことがわかる。平坦部Ａ－４の石積みＳＷ００１－Ａ４や階段状遺構ＳＸ０４のほか、溝状遺構ＳＤ０１など外構施設の整備も本段階と考えられる。

（６）16 世紀中葉～後半

等妙寺中枢域の再整備事業（Ⅱ期整備）は前段階に完成をみたが、寺容はその後天正 16 年（1588）の焼失まで存続したものと考えられ、当該期の遺物も少量ながら確認される（表 3-13：⑥）。前節でみたように、貿易陶磁器の搬入量は 16 世紀中葉頃を境に激減、その後 16 世紀後半～末にかけて新たな搬入は限定的となる。

発掘調査の結果、平坦部Ａ最終遺構面上に炭・焼土が広く検知され、被熱範囲はⅠ・Ⅱ区西側の露頭岩盤にも及ぶことから相当規模の火災に見舞われたことが判明した。文献に記された天正 16 年（1588）の火災が発掘調査によっても裏付けられたことになる。一方で、平坦部Ａ－２では火災の痕跡が認められず、観音堂は焼失を免れていた可能性が高い。

（７）17 世紀初頭前後（Ⅲ期／中世等妙寺廃絶後）

天正 16 年（1588）の焼失以後、大きな土地改変や利用はなかったことが明らかとなっている。遺構としては唯一、平坦部Ａ中央のⅡ区北側にて検出された、礎石建物跡ＳＢ０６（小堂）が該当する。本坊建物ＳＢ０３正門と一部重複し、平行した位置関係にあることから、本坊建物焼失後さほど時を経ずに建てられた、往時を偲ぶ祠のようなものではないかと推測されている（第２分冊参照）。Ⅱ区表層より出土した寛永通寶は、賽銭として置かれた可能性があろう。

２　利用形態の変遷にみる画期と背景

前項で示したように、発掘調査からみた平坦部Ａ周辺の利用状況の変遷が明らかとなった。中でも平坦部Ａ（如意顕院跡）において革新的な普請・作事（Ⅱ期整備）が行われた 15 世紀後半～ 16 世紀前半や、搬入品が減少に転じる 16 世紀中葉は、特に注目すべき画期として挙げられるだろう。以下では文献史学研究や、近年進められてきた等妙寺什物類の調査研究成果を加味し、こうした画期の背景に踏み込んでみたい。

（１）15 世紀後半～ 16 世紀前半の平坦部Ａ再整備事業（Ⅱ期整備）の背景

①Ⅱ期整備の指向性と構想時期

15 世紀後半～ 16 世紀にかけてのⅡ期整備では、旧本堂ＳＢ０１から新本堂ＳＢ０２への建て替え、苑池の改修、そして本坊建物の創建など平場全体の再整備を行っている。Ⅱ期整備を特徴づけるのは

長大な平場全体において、建物から溝などの外構施設、苑池の施設、石積みの塁線や岩盤の開削に至るまで方向軸を共有したレイアウトを指向している点にある。こうした指針は開山期に当たるⅠ期整備を踏襲するが、当初より南北軸をおよそ 10°東に振ることで、独自性と平場利用の合理性を加え、発展させたと評価できるだろう。

以上を勘案すると、Ⅱ期整備にあたっては建物や施設諸々の配置を規定する綿密かつ壮大なプランの存在が窺え、その構想は遅くとも 15 世紀中頃、平坦部Ａ西側背面の岩盤を開削、版築と石積みＳＷ００１上段構築による大規模な敷地造成の開始までには存在していたと考えられる。

②旧本堂ＳＢ０１焼失と授戒本尊図の新調

近年実施された仏画調査により、現在の等妙寺に伝わる重授戒灌頂（密教と授戒とを融合した戒家特有の儀礼）の本尊、授戒本尊図は 15 世紀半ばの作と判断されている（本章第４節参照）。等妙寺開山期にも授戒本尊図は存在したであろうが、何らかの理由で失われ、その後Ⅱ期整備に合わせて新調したものが本図とは考えられないだろうか。発掘調査結果からは旧本堂ＳＢ０１は遅くとも、鍛冶工房が操業し、新本堂を建立した前段階、15 世紀中頃までには焼失したと推測され、関係性が窺われる。

いずれにせよ、旧本堂の焼失と授戒本尊図の製作年代が、15 世紀中頃を指標とする近しい時期の事象であることは指摘できる。

③Ⅲ区庭園地区の水害

15 世紀後半に開始されたと推測される庭園地区のⅡ期整備は、開山段階のⅠ期整備と比べて粗雑な造成、作庭が目立つ。谷川からの洪水堆積土で覆われ、Ⅰ期の遺構にその影響が及んでいること、Ⅱ期段階の整備に洪水堆積土を用いた可能性があり、応急的な側面が窺われることなどから、水害が庭園における改修（Ⅱ期整備）の一因と考えることができる。

④法勝寺流重授戒灌頂道場としての本坊建物ＳＢ０３客殿

本報告書第１分冊にて報告されているように本坊建物ＳＢ０３客殿は、等妙寺で執行される重要儀式である法勝寺流重授戒灌頂の道場としての機能が考えられている。言うまでもなく建物配置や間取りは、Ⅱ期整備の構想段階から組み込まれていたと容易に想像でき、本坊建物ＳＢ０３客殿の建立がⅡ期整備の主目的であったことは明白である。

⑤伊予西園寺氏による歯長寺の庇護・氏寺化

等妙寺史の追究にあたっては南北朝期、至徳３年（1386）成立とされる『歯長寺縁起』（西予市歯長寺蔵･国指定重要文化財）の記述は重要である。その内容は歯長寺縁起という名を冠してはいるが、等妙･歯長寺縁起と呼ぶべきもので、草創期の等妙寺や歯長寺を檀越として支援した開田善覚の子息、歯長寺僧寂證（じゃくしょう）によって、等妙寺と歯長寺の創建の由来や、開田善覚の活動が筆録されている。冒頭の一文「等妙歯長両寺相互成主伴興門徒旧好条々」からは、歯長寺と等妙寺が事相寺（じそうじ）として二寺一倶の関係（歯長寺は里に設けられた教学中心の道場、等妙寺は修行道場を想定）であったと推察されている〔山本 2020b〕。

当初は二寺一倶として開創された等妙・歯長両寺であるが、14 世紀後半、南北朝期に西園寺家の

一流が宇和荘に下向して以後、次第に歯長寺の台頭ぶり、伊予西園寺氏の歯長寺庇護の傾向が顕著となる。その決定的な事象は享徳２年（1453）４月８日、伊予西園寺氏が歯長寺住持昌宗上人に宛てた寄進状（「歯長寺文書」）で確認できる。立花津（宇和島市吉田町）の 13 貫の寺領地をめぐって、歯長寺（昌宗上人）と法勝寺（紹空上人）・等妙寺（慈範大徳）（歯長寺文書には「本寺依長老紹空上人併住持慈範大徳訴訟」とある）が争った際、伊予西園寺氏は京都西園寺氏の意向を受けて、歯長寺へ安堵し、護摩堂造営料として寄進したのである。同日付の別の寄進状には「西園寺本家（京都西園寺家）尊敬之精舎」や「當家（伊予西園寺家）之氏寺」などと見えるという〔石野 2011〕。

歯長寺は、15 世紀中頃には京都西園寺氏及び伊予西園寺氏の厚い庇護により、法勝寺を後ろ盾とする等妙寺をも凌ぐほど台頭していたことが窺える。時を同じくして等妙寺は、Ⅱ期の革新的な整備を構想あるいはすでに着手しており、こうした内部分裂とも取れる事象が、天台法勝寺流円頓戒の四箇戒場としての等妙寺再興・発展を助長したのではないかと考えられる。

ちなみに先の寄進状にみえる法勝寺 21 世紹空上人は、前住等妙寺の静能と同一人物で、応永 34 年（1427）、等妙寺住持宗秀の代には、静能の発願により木造菩薩坐像（伝如意輪観音）の岩座を修造（「岩座修理銘」、「円戒十六帖」第七帖奥書）するなど、四半世紀に亘って等妙寺を支援していることが判明している〔鬼北町教委 2020〕。

⑥小結

以上のように、Ⅱ期整備にあたっての構想は、遅くとも石積みＳＷ００１上段構築をはじめとする大規模な敷地造成がなされる 15 世紀中頃までには存在していたと考えられる。その契機としては、旧本堂の焼失や庭園の水害など複合的な要因が想定されるが、当初事相寺として発展してきた歯長寺の伊予西園寺氏寺化による台頭がこれに拍車をかけ、等妙寺は元来の「戒家」法系を継ぐ寺院としての性格をより強めていったと理解しておきたい。そうした等妙寺の転換初期を支えたのが、かつての等妙寺住持でもある法勝寺 21 世紹空静能であった。

（２）16 世紀中葉における搬入品減少の背景

等妙寺中枢域のⅡ期整備は 16 世紀前半までになされた本坊建物ＳＢ０３の建立をもって完成をみる。寺容はその後、天正 16 年（1588）の焼失まで存続したものと考えられ、遺物も少量ながら継続して確認できる。一方で、貿易陶磁器などの搬入量は 16 世紀中葉頃を境に激減、その後 16 世紀後半～末にかけて新たな搬入は限定的な様相を示している。

では、Ⅱ期整備が完成をみた戦国期、等妙寺を取り巻く情勢はどのようなものであったのだろうか。文献史研究の成果によれば、膝下地や予土両国に跨る近隣の在地領主らの支援を得ながら、寺勢の維持に努めていたことが知られている。例えば、天文３年（1534）８月に西園寺玖春（後西園寺殿、板島丸串城主）は、土佐国幡多郡の和井野左近将監基延（土佐一条氏当主一条房基の被官か）らとともに、理玉和尚忌に宛てた華鬘（仏堂の荘厳具）12 個を作製し、等妙寺へ奉納している〔石野 2011〕し、同 18 年（1549）８月には檀那で三間郷金山城主の今城能光が、両界曼荼羅を等妙寺智光院へ寄進したとされる。近年の仏画調査では、開田善覚寄進本に基づく新写本として制作されたことが判明している（本章第４節）。また、天正 11 年（1583）には等妙寺膝下地の在地領主、芝一覚とその一族らが、等妙寺の観音厨子を再興し、同年末の曼荼羅供の費用を負担している〔石野 2011〕。

以上のように文献史研究や仏画調査の成果を鑑みれば、戦国期の等妙寺は近隣在地領主の庇護を受

け、寺勢を維持していたことが窺え、貿易陶磁器や備前焼など搬入品の減少をもって、必ずしも衰退・停滞とはいえない実態が浮かび上がる。本章前節でも触れたように、西日本のみならず、東アジアを取り巻く流通構造の転換期であることも一因とみられるが、周辺地域の状況も含めて、総合的に検証されなければならない。

３　本節のまとめ

以上、発掘調査からみた平坦部Ａ周辺における利用形態の変遷について、最新の所見も交えて提示してきた。特に 15 世紀後半～ 16 世紀前半にかけて顕著な平坦部Ａ全域の革新的なⅡ期整備は、発掘調査から示唆される災禍や、什物の年代観、さらには等妙寺をめぐる情勢とも符合していることを明らかにできた。

遺構群の相対的変遷については大方の承認が得られるものと考えているが、一方で段階設定の区分や表記には再考の余地が残されている。また、16 世紀中葉の画期の背景についても課題の指摘に留まったため、今後調査の進捗に応じて検討を加えることとしたい。

【参考・引用文献】

石野弥栄 2003「「歯長寺縁起」の世界－南予中世社会の一断面」『伊予史談』330 号

石野弥栄 2011「伊予における天台律系寺院の創立と展開」『西国の文化と外交＜日本中世の西国社会③＞』清文堂出版

織田誠司 2018「等妙寺旧境内の発掘調査成果について－本堂・本坊跡を中心に－」『等妙寺旧境内　国史跡指定 10 周年記念シンポジウム 中世等妙寺の具体像に迫る』鬼北町教育委員会

織田誠司 2021「等妙寺旧境内出土の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』41　日本貿易陶磁研究会

鬼北町教育委員会編 2016『国史跡等妙寺旧境内発掘調査現地説明会－「ホンジガナロ」平坦部Ａの調査報告－』資料

鬼北町教育委員会編 2020『奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展』等妙寺開基 700 年記念　鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展図録

久保智康 2020「東アジアにおける山寺造営の思想」『日本宗教史４　宗教の受容と交流』吉川弘文館

久保智康 2021a「等妙寺開創前夜の信仰空間をめぐる諸問題」『史跡　等妙寺旧境内－平坦部Ａ（如意顕院跡）発掘調査報告書（第２分冊）－』鬼北町教育委員会

久保智康 2021b「もう一つの“浄土系”庭園－観音浄土補陀落山の見立てと岩崖・窟そして池－」『令和３年度　日本庭園学会全国大会研究発表会・オンライン座談会資料集』日本庭園学会

五葉道全 2001『歯長寺縁起書－建武の中興の武士たち－』文芸社ライブラリー

山本義孝 2020a「山寺研究から霊場研究へ」『山岳信仰と考古学Ⅲ』同成社

山本義孝 2020b『山岳霊場奈良山の世界観を探る』等妙寺開基 700 年記念講演会資料　鬼北町教育委員会